

# 三重宙返りの記

海野十三

青空文庫



僕は、このところ二三ヶ月、からだの工合がよくない。それでこの日、文壇ぶんだん航空会にも、残念ながら特殊飛行は断念して、辞退を申出ておいたのであった。殊ことに、その前々日は終しゆうじつ日家にいて床についていたし、その前日は、炬燵こたつの中で終日、日米関係の本を読んでいた始末であつた。だから当日は、ふらふらするからだを豊岡まで搬はこんだようなわけで、特殊飛行をする意志は毛頭もうとうなかつたのであつた。

「海野さん。さあ、支度したくをなさい」

「僕は、今日は、乗りませんよ」

「そんなことはない。あんたが乗らないということはない。そんなことをいうと、皆、乗らないといい出すよ。さあ、支度を」

「僕は、からだが悪いので……」

「どこが、どうわるい」

「心臓やその他……機上で人事不省じんじふせいになるなんて、醜態しゆうたいですからねえ」

「なあに、心臓なんか、大丈夫だ。こんな機会は二度とないから、乗りなさい」

これは西原少佐殿と僕との押問答だ。これを傍で聞いている皆々は、愉快そうににやに

や笑っているが、僕は笑い事ではない。

こんなことを数回くりかえした。

西原少佐殿は、熱心にくりかえし薦め、そして僕を元気づけてくれる。ここに於て、僕は秒前までの乗らないという決心をさらりと翻し、

「はい、乗りましょう」

といって、オーバーの釦ボタンに手をかけた。これが最初の宙返りであった。意志というか覚悟というか、その宙返りであった。決意してしまえば、元々好きなことなんだから、とたんに、わがからだはもうふわつと空に浮んだようだった……。

機は約千五百メートルにとびあがった。

はるかな地上には煙霧が匍はい、夕陽はどんよりと光を失い、貯水池と川とだけが、硝子ガラスのように光っていた。と、突如、からだがぐーつと下に圧うえられた。機は奇妙な呻うなりをたてはじめた。いよいよ始まった、宙返りが……。

宙返りをしていることは、はつきり分っているくせに、「自分は今、本当に宙返りをやっているのかしら、夢を見ているのではないか」という疑念がしきりと湧いた。

——そのとき、虚空こくうと大地とが、まるで扁平へんぺいな壁のように感じられた。空は湖のよう

だ。ぐうーと水平線があがって、上から巨大なる島が下りてきた——と思つたら、それは島ではなく、わが地球であつたのだ。芝居の背景が、ぐるぐるまわっているような感じでもあつた。僕は、ひたすら錯覚の世界を追つていたので。

はげしい横転の始まつた瞬間には、僕の身体は、機外においてげぼりにされたように感じた。水平線が、きらきらと、交錯した水車の車軸のようにみえる。奇妙なことだ。

一等気持のわるかつたのは、上昇反転であつた。機はぐんぐん垂直に上昇していつて、その頂上で、エンジンはたと停り、そして失速する。からだは、空中にびたりと停つた。まるで空中に腰掛があつて、その上に、ふわりと胡坐をかいたようなふしぎな気持だ。そこまではいいが、とたんに、下腹を座席へ固くしめつけている筈の生命の帯皮が俄かに緩み、からだは逆さになつて、その緩んだ帯皮から、だらりとぶらさがる。機を放れて、単身墜落の感じだ。はつと目を前方に向け、そこにあるべきはずの地平線を探るのだが、地平線は無く、顔のまん前にあつたのは、何ともいえない気味の悪い青黒い壁のような大地であつた。いつの間にか機首を下にした機は、次の瞬間、どどどと奈落に顛落する……。

特殊飛行中、僕は特に頭を下げて、自分のからだに、今如何なる苦痛が懸っているかを

特に注意してみた。急上昇のときだと思うが、胸と太ももどが、目に見えない魔物のために、今にも押し潰されそうに痛むのを発見して、ああこれこそ我慢づよいわが空の勇士が、絶えず相手に闘っているところの見えざる敵「慣性」だなどと悟った。

機が地上に下りると、僕は急に胸先がわるくなつて、むかむかしてきた。生唾が、だらだらと出てきた。全身には、びっしり汗をかいていた。だが僕は、大声で叫びたいほど愉快であつた。

僕は、機上から下りて、校長閣下を始め御歴々に対し、初めて拳手の礼をもつて挨拶をした。鼻汁がたれているのはわかつていたが、これを拭うすべをしらないほど平常の身嗜みに無関心だつた。

西原少佐殿は、さつきとは打つてかわり、それからいくどもくりかえし、

「海野さん、まだ胸がわるいか。まだ、なおらんか」

と、電車の中までも、いたわつてくれた。

はつきり書くと、その夜八時半ごろになつて、この胸のわるさは、やつと癒つた。と同時に、ここ数ヶ月の気分の悪さが、一ぺんに吹きとんでしまった感じがした。決行するとは全然予期しなかつた特殊飛行は、僕の病気までを宙返らせた。最悪の状況下にある自分

のからだを駆つて、よくも宙返りに耐えたということは、私事ながら、実に大きな収穫であつた。病氣のときは、進んで特殊飛行を志願することにした。但しそう思ったのは、まるで生れかわつたように元気になつた翌日のことではあつたが……。



# 青空文庫情報

底本：「海野十三全集 別巻1 評論・ノンフィクション」三一書房

1991（平成3）年10月15日第1版第1刷発行

初出：「航空朝日」朝日新聞東京本社

1940（昭和15）年4月号

入力：田中哲郎

校正：土屋隆

2005年6月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 三重宙返りの記

海野十三

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>